

信(しん)頼と伝(でん)統 『生き生き元気、伸び育つ新田っ子』
学校教育目標(目指す児童像) よく学ぶ子 思いやりのある子 たくましい子

新田中学校区の目指す子ども像
自ら学び(探究心)心豊かに(共生心)たくましく生きる(自律心)新田中15歳の姿



新たなスタート

校長 嶋田 弘之

例年より遅れて金木犀の橙色の花と甘い香りが秋の空気を包む頃となりました。金木犀は沈丁花、山梔子とともに『三香木』として知られています。その香りは「千里先まで届く。」といわれます。

先日、新田小学校開校150周年記念式典を開催しました。お忙しい中、多くのご来賓の方々や新田小の教育活動をご支援くださっている方々にご臨席を賜りました。改めまして、厚くお礼申し上げます。式典に先立ち開校150周年記念集会において、新田小学校に学ぶ者として子供たちに心に留めておいてほしいことを次のとおり話しました。

ひとことで150年といいますが、日数にすると5万4千日です。時間にすると131万4千時間となります。では、秒にすると何秒でしょう。答えは47億3040万秒です。47億3040万秒の間に新田小はさまざまな歴史を刻んできました。そのうちの三つのできごとについて、当時の大人たちの子供たちに対する期待や思いをお話しします。

一つ目は、新田小学校開校当時の子供たちへの期待です。時代は明治六年、日本は強い国、豊かな国を目指して、「全国に学校をつくろう。」という動きが出てきました。これが、6年生になると社会で学ぶ、学制頒布です。これにより、本校の源である『綾川学校』『勸善学校』『中曽根学校』の三校が順次開校しました。このころの子供たちの生活は、一日の大半が家を支える大事な働きをしていました。いわゆる、家の手伝いです。手伝いといっても短い時間で簡単に済むものではありません。農作業などの手伝いをしたり幼い弟や妹の面倒をみたりするなど、とても大切な役目を果たしていました。そういった子供を学校に通わせるのですから、このころの大人は子供たちに対して、家族の将来の幸せだけでなく、日本の未来を託す大きな期待を子供にかけていたことが分かります。

二つ目は、開校50周年時に発生した大きな災害です。大正12年9月1日、関東大震災により、本校は大きな困難に直面します。多くの尊い命が失われ、校舎が倒壊するほどの甚大な被害を受けたのです。「大切なもの」と「大切な人」「友達」を失うといった、絶望の淵に大人も子供も立たされたのです。そんな中で、地震が発生して二週間がたった頃から、『職員と児童は倒壊した校舎の片付けを行った。』という作文が残っています。自然の脅威に晒されながらも希望の光を見失わずにいた、当時の子供たちと、先生を含めた地域の人たちは『たくましく生きる』という信念によって、新田小の歴史が引き継がれたのです。

三つ目は、地域の方々の深い愛情です。代表的なできごととして、昭和38年にプールが建設されたことが挙げられます。子供の水の事故の皆無と水質汚染から子供たちを守るという地域の方々の深い愛情により、寄附が集まったという記録があります。こういった、気持ちに支えられ、新田小の今があることが分かります。

期待と願い、深い愛情に支えられ47億3040万秒の時を刻んできたのです。今、新田小学校で学んでいる皆さんに対する大人たちの思いも同じです。今日を新たなスタートとしてその思いに応え、これからも永く続く新田小の歴史を創る一人として、何をすべきか、しっかりと考えて生きていきましょう。

私たち大人も、前述した先人たちの思いが、「千年先まで届く。」よう知恵と力を合わせてまいりたく存じます。本校の教育活動に対しましてご支援を賜りますようお願い申し上げます。